

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：32627

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720156

研究課題名(和文) ロマン主義時代のフランス文学と引用、剽窃、創造的模倣 ネルヴァルを中心に

研究課題名(英文) Citation, plagiarism, and creative imitation within French literature during the Romantic period around Nerval's works

研究代表者

辻川 慶子 (Tsujikawa, Keiko)

白百合女子大学・文学部・准教授

研究者番号：80538348

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ジェラルム・ド・ネルヴァルにおける出典研究をふまえて、19世紀前半のフランス文学における引用、剽窃、創造的模倣の問題を歴史的に再検証することである。まず、19世紀フランスの作家における引用・剽窃の営為と比較する上で、『作家の聖別』(ポール・ベニシュ)などの基本文献を翻訳し、小ロマン派におけるリライトの重要性を確認した。さらにネルヴァルが自らの作品の中に過去の書物を多数収集するのは、創造性の欠如ではなく、むしろ積極的に過去を復元・存続させようとする意識の現れであることを確認し、作家固有の引用の詩学を分析した。

研究成果の概要(英文)： In this research, we sought to understand the art of rewriting, such as through citation, plagiarism, or creative imitation of the French writers of the Romantic period, especially in the works of Gerard de Nerval. First, we attempted to understand the question of the Romantic period, in translating "The Consecration of the Writer" by Paul Benichou. We determined the significance of the rewriting, perceiving it as a form of opposition among the writers known as "the minor romantics". We also analyzed the books and documentation that was referred to by Gerard de Nerval in the creation of his books, particularly "Les Illumines", to identify the quoted texts. Furthermore, we analyzed how the citation and restructuring of the quoted texts were elemental for the poet. Our aim was to demonstrate that Nerval was inspired by the specific poetics and aspired to maintain philosophies and conceptions from books of a bygone era through his works.

研究分野：フランス文学

キーワード：ネルヴァル ロマン主義 引用 剽窃 模倣 リライト 歴史叙述

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまでの研究において、ネルヴァルの『幻視者たち』の典拠調査を進め、作品の実に8割近くが出典をふまえた引用や借用であることを確認していた。その中には、人物事典や作家の全集など、同時代に広く流布している文献からの引用も多い。こうした出典の分析により、作家が引用のモザイクからいかに新たな意味を創成しているかを問いただす必要が生じた。ネルヴァルには、オリジナルの創作ではない作品、つまり引用、借用、剽窃、翻訳など他者の作品のリライトとしての作品が多いが、これらがどのような意味を持つのか、さらなる解明が必要である。

ネルヴァルの創作活動を同時代の他の作家と比較してみたところ、多くの作家においても引用と借用が重要な意味を持っていることが確認される。19世紀初頭を代表する作家シャトブリアンも『ランセの生涯』ではネルヴァルと同じ人物事典を借用し、その代表作『墓の彼方からの回想』も、アントワヌ・コンパニオンの言葉によると、「すべてが引用だ」ということができる。他方で、シャルル・ノディエは『合法的文学の問題』というユーモラスな剽窃論を残している。

文学史的通説にしたがえば、19世紀前半のロマン主義時代は、模倣ではなく独創性という価値が称揚され、著作権確立に向けての動きが高まりつつある時代であった。そして、同じ時期に借用は徐々に剽窃だと告発されるようになり、それと同時に独創性の概念や「影響の不安」(ハロルド・ブルーム)を生むようになる。しかし、19世紀における引用や剽窃の問題ははるかに複雑な問題をはらむものであり、さらに精密な実証的検証が必要となる。模倣を創作活動の基礎に置く古典主義と、作家の天分や靈感による独創性を求めるロマン主義という安易な二項対立を修正するためにも、ノディエやネルヴァルといった作家を再評価し、その言説に光を与えることは重要な意味を持つ。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ジェラルド・ド・ネルヴァル(Gérard de Nerval, 1808-1855)における出典研究をふまえて、19世紀前半のフランス文学における引用、剽窃、創造的模倣の問題を歴史的に再検証することである。具体的には、(1)19世紀フランスの作家における引用・剽窃の営為や理論的考察と比較した上で、(2)ネルヴァル『幻視者たち』(*Les Illuminés*, 1852)の出典に関わる文献データを整理し、(3)ネルヴァルにおける引用の詩学の独自性を明らかにする。将来的には、引用、剽窃、創造的模倣に関する総合的研究へと発展させ、19世紀および他世紀の研究者とともに共

同研究を行うことを視野に入れている。

3. 研究の方法

本研究においては、19世紀前半における引用、剽窃、創造的模倣の歴史的検証というマクロの視点と、ネルヴァル『幻視者たち』を中心としたミクロの個別研究の視点を交差させるというクロス・リーディングの手法を取り入れた。具体的には、以下の方法に従って研究を進めてきた。

(1) 典拠研究・間テキスト性理論からリライトの歴史へ

まずは、リライトに関する先行研究を確認して、問題点の整理を行った。引用や剽窃に関しては、従来、(a)作品の創作過程において参照・借用された出典を確定する文献学的研究と(b)間テキスト性など、複数のテキスト間の関係について考察する理論的研究に分かれる傾向があった。(a)の典拠研究は、生成研究とともに文献学的調査として作品研究の根幹を占めるものである。(b)の間テキスト性などに関する理論的研究は、1969年にクリステヴァが「間テキスト性」という用語を提唱して以来、主に70年代から80年代にかけて多くの研究が発表されてきた。フランス語圏の研究に限っても、リファテールやローラン・ジュニーなどの理論的論考、ジェラルド・ジュネット『パランプセスト』における模倣やパロディに関する類型論的分析、あるいはアントワヌ・コンパニオンによる『第二の手』における引用論、ミシェル・シュネデルの『言葉を盗む者』における剽窃の歴史的・精神分析的解釈、さらには「作品の記憶」を強調したティフェヌ・サモヨーやソフィー・ラボーやナタリー・ピエゲ＝グロの研究が挙げられる。近年ではさらに特定の作家やテーマやジャンルに関して、リライトという営為自体に光を当てる研究が散見されるようになったが、これらを統合するような歴史実証的な研究は、国内外を見ても到底十分とはいえない。(a)の文献学的調査は個々の作家研究の枠内にとどまることが多く、(b)の理論的著作は、「すべて書かれたものは引用の織物である」という言葉に示されるように、作家や時代の固有性や歴史性を捨象する傾向が強い。方法論的にも今後新たな整備が待たれる分野といえるだろう。

(2) 文学事象の歴史

創作と引用という事象を理解することは、各時代における文学をめぐる諸制度や文学・作家・作品などの概念規定にも関わるものとなる。17世紀における『作家の誕生』(アラン・ヴィアラ)や19世紀における『作家の聖別』(ポール・ベニシュ)を始めとして、『フランス文化史』(ジャン＝ピエール・

リウー、ジャン＝フランソワ・シリネリ）など、文学の諸制度をめぐる文化史的・文学社会学的研究は近年、国内外で急速に注目を浴びている分野である。さらに、この問題は文学研究と歴史研究の対話という学際的な共同研究へと道を拓いてきた（クリスチャン・ジュオー、ジュディット・リオン＝カーン）。引用や模倣などのリライトの営為も、文学場の成立、作家の社会的地位、発表メディアや読者層、さらには著作権の概念の問題と切り離すことができない。本研究においても、こうした文化史的・文学社会的分析方法を取り入れ、積極的に紹介することは不可欠であると考えられる。

(3) 19世紀前半における歴史叙述と史料の引用に関する調査と考察

19世紀は歴史の世紀と呼ばれ、種々様々な歴史ジャンルが誕生したが、その中でも重要な転換点となったのが古文書と史料の発見である。数々の古文書や史料が次々と公刊され、例えば歴史家ミシュレがそのフランス史において新たな史料調査を組み入れたことは周知の通りである。歴史のみならず歴史小説や伝記などの歴史ジャンルにおいても、どの史料を用い、それをいかに提示するのかという問題が新たに浮上してくる。多くの歴史小説において、その実証性を証明するかのようには、資料のどの部分を引用するかによって、歴史家、作家の歴史観が浮き彫りとなる（王侯、革命家などの主要人物の言葉を引用するのか、民衆の言葉や伝説を引用するのか、重要な歴史上の事件に関して引用するのか、二次的な文献の言葉を引用するのか）。ネルヴァルの作品研究においても、歴史叙述と文学という二領域を重ね合わせながら、史料の参照や引用の詩学を分析することを主要な分析方法としたい。

4. 研究成果

本研究の成果として、(1)ロマン主義時代に関する思想史・文化史的研究の紹介 (2)小ロマン派におけるリライトの営為に関する研究 (3)ネルヴァルにおける歴史叙述と引用の詩学の分析が挙げられる。この3点に分けて、研究成果の報告を行いたい。

(1) ロマン主義時代に関する思想史・文化史的研究の紹介

まずロマン主義という時代背景を明らかにするために、1830年のロマン主義運動についての調査を進めた。この過程で、2冊の共訳書『作家の聖別』（ポール・ベニシュー著、水声社、2015年、片岡大右他との共訳）、および『100語でわかるロマン主義』（ブリュノ・ヴィアール著、白水社、2012年、小倉

孝誠との共訳）を刊行した。特に前者は、既存の宗教に代わる非宗教の精神的権力の成立という大きな思想史的潮流の中でロマン主義をとらえるもので、文学史のみならず、社会・政治思想史においても不可欠の参照項となっている。「文学」というものの概念規定、社会における文学者の位置、さらには近代社会における統合原理の問題など今なおアクチュアルな問題を考える上で、ロマン主義が持つ重要性を指摘した功績は大きい。

この翻訳は、ロマン主義時代における作家の表象および独創性という価値の称揚を理解するためにも大きな意味を持つ。なお、研究代表者は、ポール・ベニシューのロマン主義四部作の続巻『預言者の時代』の翻訳にも引き続き取り組んでいる。これらの共訳書は、文学のみならず社会・思想史的視点からもロマン主義時代への幅広い理解をもたらすもので、重要な学術的および社会的貢献をなすものだといえるだろう。

(2) 小ロマン派におけるリライトの営為に関する研究

フランス革命後の新社会を導く祭司としての作家像（「作家の聖別」）が確立したのと同時期に、ノディエ、ゴーチエ、ネルヴァルなどの作家は、大衆文学との接点を保ちながら、あるいは「作家」という表象を揶揄しながら、独創性という概念を覆す作品を発表している。この問題を取り上げるため、「〈若きフランス〉と「文学的なもの」の解体——ノディエ、ゴーチエ、ネルヴァルを中心に」（日本フランス語フランス文学会全国大会ワークショップ報告）という研究発表で問題提起を行った。「作家」が社会において果たすべき役割をどう捉えていたか、という自己認識の問題は、独創性と模倣の問題にも大きく関わってくる。新社会の精神的権力を担う大作家（ラマルチヌ、ヴィニー、ユゴー）に対し、「若きフランス」または「幻滅の流派」と呼ばれる作家・詩人は、「詩人の使命」とは無関係に、大衆文学（メロドラマ、大衆小説、パントマイム）という模倣や剽窃を繰り返すジャンルに接近しつつ創作を行っていた。その中で、独創性と模倣に関する辛辣な問題提起が行われていることは注目に値する。

さらに、これらの作家においては、作家の自己像、自伝においても引用や剽窃といったリライトが見られる。「自伝と過去の現前—レチフ・ド・ラ・ブルトンヌからネルヴァルへ」（「〈生表象〉と近代」シンポジウムにおける研究発表、同題の報告論集（水声社）にて刊行予定）では、ネルヴァル独自の作品創作とされているものが、前世紀の作家の模倣であるという矛盾を通して、ネルヴァルにおけるリライトの重要性を論じた。特にネルヴァルの自伝作品がほとんど他者の作品の焼き直しといえる部分を持つことは意義深いものである。ネルヴァルにおいてもレチフ

においても、過去に書かれたテキストを再録するという「書き直し」の行為は、過去の記憶を書きとどめるといった積極的な意味を担うものである。

これらの研究を通して、ネルヴァル周辺の小ロマン派と呼ばれる作家・詩人における引用、剽窃、パロディの重要性が再認識された。大衆文学における主題の焼き直しという点も含めて、今後もさらなる研究が必要だと思われる。

(3) ネルヴァルにおける歴史叙述と引用の詩学の分析

ジェラルド・ド・ネルヴァルに関しては、歴史叙述という点を中心に、引用と借用の問題に取り組んだ。ネルヴァルの『幻視者たち』は過去を題材にした伝記作品であり、歴史ジャンルの一つに数えることができる。さらに同時代に集積されつつあった知をどのように文学作品に取り込むかという問題をネルヴァルもまた独自の方法で探求している。本研究期間中、夏季休暇を利用してフランス国立図書館における文献調査を行い、ネルヴァルが作品執筆の際に参照した書物、定期刊行物、史料の追加調査を行った。

2014年6月には、フランス国立古文書館(パリ)で開催された国際シンポジウム「ネルヴァル—歴史と政治」に参加し、「Histoires transcrites : les jeux de la citation et la poétique de l'histoire dans *Les Illuminés de Nerval*」(「歴史と転写—ネルヴァル『幻視者たち』における引用と歴史の詩学」と題する口頭発表を行った。ネルヴァルは同時代の小説や歴史叙述ですでに既出のテーマを借用しながらも、予想外の要素を組み合わせることで独自の歴史叙述を提示している。その中には、入手困難な貴重書の他に、同時期の定期刊行物に掲載されていた新聞・雑誌記事、アレクサンドル・デュマやウージェーヌ・シユの大衆小説も含まれている。多種多様な源泉からテキストを収集・選別する中で、次第に独自の歴史観が形成されていく。さらに過去のテキストの再構成という行為自体において、ネルヴァルは独自の「引用の詩学」を提示するのである。この成果を踏まえた論文は、同シンポジウムの報告論集(Hermann社)にて刊行予定である。

『幻視者たち』における歴史叙述と引用の問題に関しては、これ以外にも成果発表として論文2点を執筆した。ネルヴァルが自らの作品の中に過去の書物を多数収集するのは、創造性の欠如ではなく、むしろ積極的に過去を復元・存続させようとする意識の現れであるのではないか。この観点から、サン＝ドニ大聖堂の修復という当時の時事的話題に関する作家の考察を辿り、論じたのが「ネルヴァル、廃墟と宗教—『幻視者たち』「クイントゥス・オークレール」(『Stella』第33号に発表)である。他方、次の論考では、『幻視者たち』全編によってどのような歴史観が

提示されているかを論じた(« Nerval et les limbes de l'histoire—*Les Illuminés ou les Précurseurs du socialisme*»(「ネルヴァル、歴史の冥府—『幻視者たち、あるいは社会主義の先駆者』」、*Comment la fiction fait histoire - Emprunts, échanges, croisements*, Honoré Champion (共著)にて近刊予定)。

ネルヴァルが過去の書物を引用するのは、歴史の歪曲を防ぐため、そして過去の記憶を抹殺しないためという強い意味を持つ。歴史叙述における引用や借用という行為が、政治的抵抗の意味を持ち得ることを、以上の3点の論考で確認することができた。

以上の研究成果を通して、フランス・ロマン主義時代における「文学」や「作家」の概念規定という問題とともに、小ロマン派、特にジェラルド・ド・ネルヴァルにおける歴史と引用の詩学の問題を考察することができた。本研究を通じて、引用、剽窃、創造的模倣というリライトの問題は、19世紀において重要な論点となっていることが確認できたと同時に、19世紀を超えてさらに時代横断的な検証を行う必要があることも感じられた。今後は共同研究という形で、さらに通時的かつ包括的な「引用の文化史」構築の可能性を探りたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

①辻川慶子、ネルヴァル、廃墟と宗教 - 『幻視者たち』「クイントゥス・オークレール」、『Stella』第33号、九州大学フランス語フランス文学会発行、p.195-211、査読有

[学会発表] (計 4 件)

①Keiko Tsujikawa, Histoires transcrites : les jeux de la citation et la poétique de l'histoire dans *Les Illuminés de Nerval* (歴史と転写 - ネルヴァル『幻視者たち』における引用と歴史の詩学), Colloque : Nerval, histoire et politique (ネルヴァル、歴史と政治シンポジウム), 2014年6月6日, パリ(フランス)

②辻川慶子、レチフ、ネルヴァルと過去の現前—伝記、演劇、刻印をめぐる、〈生現象〉の近代—自伝・フィクション・学知、2014年2月1日、2月2日、一橋大学(東京都国立市)

③辻川慶子、ネルヴァルにおける歴史と宗教
－「預言者の時代」から『幻視者たち』へ、
歴史記述研究会、2013年3月18日、京都大
学（京都府京都市）

④辻川慶子、<若きフランス>と「文学的なも
の」の解体－ノディエ、ゴーチュ、ネルヴァ
ルを中心に－、日本フランス語フランス文学
会秋季大会ワークショップ、2012年10月21
日、神戸大学（兵庫県神戸市）

〔図書〕（計 3 件）

①Keiko Tsujikawa 他, Honoré Champion,
Comment la fiction fait histoire –
Emprunts, échanges, croisements, («Nerval
et les limbes de l'histoire - *Les Illuminés*
ou les Précurseurs du socialisme» (「ネルヴ
アル、歴史の冥府－『幻視者たち、あるいは
社会主義の先駆者』」)、p.95-108を担当)、田
口紀子監修、2015年発行確定、352ページ

②辻川慶子（他訳）、水声社、作家の聖別－
1750年-1830年 近代フランスにおける世
俗の精神的権力到来をめぐる試論、ポール・
ベニシュー著、2015年、687ページ（片岡大
右、原大地、古城毅との共訳）

③辻川慶子(他訳)、白水社、100語でわかる
ロマン主義、ブリュノ・ヴィアール著、2012
年、176ページ（小倉孝誠との共訳）

6. 研究組織

(1)研究代表者

辻川 慶子 (TSUJIKAWA, Keiko)
白百合女子大学・文学部・准教授
研究者番号：80538348